

あひると猿

寺田寅彦

青空文庫

去年の夏 信州 沓掛駅に近い湯川の上流に沿うた谷あいほしのおんせんの
 星野温泉に前後二回合わせて二週間ばかりを全く日常生活わづらの煩
 いから免れて閑静に暮らしたのが、健康にも精神にも目に見えて
 よい効果があつたように思われるので、ことしの夏も奮発して出
 かけて行つた。

去年と同じ家のベランダに出て、軒にかぶさる厚朴ほおのきの広葉を
 見上げ、屋前に広がる池の静かな水面を見おろしたときに、去年
 の夏の記憶がほんの二三日前のことであつたようによみがえつて
 来た。十か月以上の月日がその間に経過したとはどうしても思わ
 れなかつた。信州における自分というものが、東京の自分のほか

にもう一つあって、それがこの一年の間眠っていて、それが今ひよつくり目をさましたのだというような気がするのであった。

このように、すべてのものが去年とそっくりそのままのようであるが、しばらく見てみるとまた少しずついろいろの相違が目について来るのであった。たとえば池のみぎわから水面におおいかぶさるように茂った見知らぬ木のあることは知っていたが、それに去年は見なかつた珍しい十字形の白い花が咲いている。それがひびやこうえん日比谷公園の一角に、英国より寄贈されたものだという説明の札をつけて植えてある「花水木」はなみずきというのと少なくとも花だけはよく似ているようである。しかし植物図鑑で捜してみるとこれは

「やまぼうし」一名「やまぐわ」(Cornus Kousa, Buerg.) という

ものに相当するらしい。

とにかく、わずかな季節の差違で、去年はなかつたものが、今突然目の前に出現したように思われるのであつた。不注意なわれわれ素人しろうとには花のない見知らぬ樹木はだいたい針葉樹へんようと扁葉樹じゆとの一二色ふたいろぐらいか、せいぜいで十種二十種にしか区別がで

きないのに、花が咲いて見るとそこに何か新しい別物が生まれたかのように感じるものらしい。無理な類推ではあるが人間の個性も、やっぱり何かしらひと花咲かせてみないと充分にその存在がはつきりしない、あれと同じだというような気がするのである。

去年の七月にはあんなにたくさんに池のまわりに遊んでいたきれい鶺鴒せがことしの七月はさっぱり見えない。そのかわりに去年はた

つた一匹しかいなかったあひるがことしは十三羽に増殖している。鴨かものような羽色をしたひとつがいのほかに、純白の雌めすが一羽、それからその「白」の孵ふ化かしたひなが十羽である。ひなは七月に行つた時はまだ黄色い綿で作つたおもちゃのような格好で、羽根などもほんの琴の爪つめぐらいの大きさの、言わば形ばかりのものであつた。それでも時々延び上がつて一人前らしく羽ばたきのまね事をするのが妙であつた。麦笛を吹くような声でピーピーと鳴き立ててはベランダの前へ寄つて来て、飯の余りやせんべいの欠けらをねだるのである。それからまた池にはいったと思うとせわしなく水中にもぐり込んで底の泥どろをくちばしでせせり歩く。その水中を泳ぐ格好がなかなか滑こっけい稽いで愛あい敬きようがあり到底水上では見

られぬ異形のしょうようせい小妖精の姿である。鳥の先祖ははちゅう爬虫だそうであるが、なるほどどこかわに鰐などの水中を泳ぐ姿に似たところがあ
るようである。もつとも親鳥がこんな格好をして水中を泳ぎ回
ことは、かつて見たことがない。この点ではかえって子供のほう
が親よりも多芸であり有能であるとも言われる。親鳥だと、単に
ちよつと逆立ちさかだをしてしつぽを天に朝ちようしさえすればくちばしが自
然に池底に届くのであるが、ひな鳥はこうして全身を没してもぐ
らないと目的を達しないから、その自然の要求からこうした芸当
をするのであろうが、それにしても、水中にもぐっている時間を
測ってみるとやはりひな鳥のほうが著しく長い、大概七秒か八秒
ほどの間もぐって水底を泳ぎ回っているのに、親鳥のほうはせい

せい三四秒ぐらいでもう頭を上げる。これはたしかにひなと親鳥とではその生理的機能にそれだけの差があることを意味するのではないかと思われる。

かもは

鴨羽の雌雄夫婦はおしどり式にいつも互いに一メートル以内ぐらいの間隔を保つて遊ゆうよく弋よくしている。一方ではまた白の母鳥と十

羽のひなどが別の一群を形づくつて移動している。そうしてこの二群の間には常に若干の「尊敬の間隔」が厳守せられているかのように見えていた。ところがある日その神聖な規律を根底から破棄するような椿事ちんじの起こつたのを偶然な機会で見撃することができた。いつものように夫婦仲よく並んで泳いでいたひとつがいの雄鳥のほうか、実にはなはだ突然にけたたましい羽音を立てて水

面を走り出したと思うとやがて水中に全身を没してもぐり込んだ。そうしてまっしぐらに水中をおそらく三メートル以上も突進して行つて、静かに浮かんでいる白の親鳥のそばに浮き上がったかと思つと、いきなりその首筋に食いついて、この弱々しい小柄の母鳥のからだを水中に押し沈めた。驚いて見ていると、この暴君はまもなくこの哀れな俘虜ふりよを釈放して、そうしてあたかも何事も起こらなかつたように悠々ゆうゆうとその固有の雌鳥の一メートル以内の領域に泳ぎついて行つた。善良なるその妻もまたあたかもこの世の中に何事も起こらなかつたかのように平静な態度でこの不倫の夫を迎えたのであつた。一方ではまた、突然の暴行の後に釈放された白い母鳥も、ほんのちよつとばかり取り乱した羽毛をくちば

しでかいつくろって、心ばかりの身じまいをただけで、もう何事もなかつたように、これも瞬間の驚きから回復したらしい十羽のひなを引率してしずしずと池の反対の側へ泳いで行くのであつた。離婚問題も慰藉料問題も鳥の世界には起こり得ないのである。

自分の到着前には雄が二羽いたそうである。その中の一羽がむやみに暴^{ぼうれい}戻で他の一羽を虐待する。そのたびに今もいる鴨羽^{かもは}の雌^{めす}は人間で言わば仲を取りなし顔とでもいったような様子でそば近く寄って行って、いつもとは少しちがった特殊な低い鳴き声を発していたそうであつたが、そのうちにある日突然その暴君の雄鳥の姿が池では見られなくなつたそうである。たぶん宿の廚^{くりや}の料

理人が引致して連れて行ったものらしく、ともかくもちょうどその晩宿の本館は一団の軍人客でたいそうにぎやかであったそうである。そうしてそのときに池に残された弱虫のほうの雄が、今ではこの池の王者となり暴君となりドンファンとなっているのである。

七月末に一度帰京してちようど二週間たつて再び行って見て驚いたのはあひるのひなの生長の早いことであつた。あの黄色いうぶ毛はいつのまにか消えうせて、もうそろそろ一人前の鴨羽に近い色彩の発現が見える。小さなブーメラング形の翼の胚芽はいがの代わりにもう日本語で羽根と名のつけられる程度のもものが発生している。しかしまだ雌雄の区別が素人目しろうとめにはどうも判然としない。

よく見るとしつぽに近い背面の羽色に濃い黒みがかつた縞しまの見えるのが雄らしく思われるだけである。あひるの場合でもやはりいわゆる年ごろにならないと、雌雄の差による内分泌の分化が起こらないために、その性的差別に相当する外がい貌ぼうじょう上じょうの区別が判然と分化しないものと見える。それだのに体量だけはわずかの間に莫ばくだい大な増加を見せて、今では白の母鳥のほうがかえってひなの中の大柄なのよりはずっと小さく見えるくらいであった。一方で例のドンファンの雄鳥はと見るとなんとなく羽色がやつれたように、首のまわりのあの美しい黒い輪も所まだらにはげちよろけているのであった。なんだか急に年を取ったように見える。こうした変化がたった二週間ばかりの間に起こったのである。浦うらしま島の

物語の小さなひな形のようなものかもしれない。

植物の世界にも去年と比べて著しく相違が見えた。何よりもととしては時候が著しくおくらせているらしく思われた。たとえば去年は八月半ばにたくさん咲いていた釣舟草つりふねそうがことしの同じころにはいくらかも見つからなかった。そうして九月上旬にもう一度行つたときに、温泉前の溪流けいりゅうの向こう側の林間軌道を歩いていたらその道ばたにこの花がたくさん咲き乱れているのを発見した。

星野滞在中ほしのに一日小諸城趾こもろじょうしを見物に行つた。城の大手門を見込んでちよつとした坂を下つて行くのであるが、こうした地形に拠よつた城は存外珍しいのではないかと思う。

とうそんあん
藤村庵

藤村庵というのがあって、そこには藤村氏の筆跡が壁に掛け並べてあったり、藤村文献目録なども備えてある。現に生きて活動している文人にゆかりのある家をこういうふうにしてあたかも古人の遺跡のように仕立ててあるのもやはりちよつと珍しいような気がする。

天守台跡に上っているとどこかからすの鳴いているのが「アベバ、アベバ」と聞こえる。こういうからすの声もめつたに聞いたことがないような気がした。石崖いしがけの上の端近く、一高の学生が一人あぐらをかいて上着を頭からすっぽりかぶって暑い日ざしをよけながら岩波文庫らしいものを読みふけている。おそらく「千曲川ちくまがわのスケッチ」らしい。もう一度ああいう年ごろになつ

てみたいといったような気もするのであった。

園内の溪谷けいこくに渡した釣り橋を渡って行くとき向こうから来た浴衣姿ゆかたすがたの青年の片手にさげていたのも、どうもやはり「千曲ちくまが川のスケッチ」らしい。絵日傘えひがさをさした田舎いなかくさいドイツ人夫婦が恐ろしくおおぜいの子供をつれて谷を見おろしていた。

動物園がある。熊くまにせんべいを買って口の中へ投げ込んでやる。口をいっぱいにあいて下へ落ちたせんべいのありうる可能性などは考えないで悠然ゆうぜんとして次のを待っている姿は罪のないものである。自分らと並んで見物していた信州しんしゅう人らしいおじさんが連れの男にこの熊は「人格」が高いとかなんとかいうような話をしていた。熊の人格も珍しい。

猿さるの檻おりはどこの国でもいちばん人気がある。中に一匹腰が抜けて足の立たないのがいて、他の仲間のような活動を断念してたいていいつも小屋の屋根の上でごろごろしている。それがどうかして時おり移動したくなるどひよいと逆立さかだちをして麻痺まひした腰とあと足を空中高くさし上げてそうして前足で自由に歩いて行く。さすがに猿だけのことはあるのであるが、とにかくこれもオリジナールである。

吸っていた巻たばこき煙草の吸いがらを檻の前に捨てたら、そこにしやがんで見物していた土地の人らしいじいさんが、そのまだ火のついていままの吸いがらをいきなり檻の中へ投げ込んだ。すると、地べたにすわっていた親猿が心得顔に手を出して、手のひら

を広げたままで吸いがらを地面にこすりつけて器用にその火をもみ消してしまった。そうしてその燃えがらをつまみ上げ、子細らしい手つきで巻き紙を引きやぶって中味の煙草を引き出したと思うといきなりそれを口中へ運んだ。まさかと思つたがやはりその煙草を味わっているのである。別にうまそうでもないが、しかしまたあわてて吐き出すのでもなく、平然ときわめてあたりまえなような様子をしてすましているのであつた。これも実に珍しい見ものであつた。ここの猿はおそらくもうよほど前からこうした「吸いがら教育」を受けているのであろうと想像された。

絶壁の幕のあなたに八月の日光に照らされた千曲川^{ちくまがわ}沿岸の平野を見おろした景色には特有な美しさがある。「せみ鳴くや松の

こずえに千曲川。「こんな句がひとりでにできた。

歸りに沓掛くつかけの駅ほしのでおりに星野行きの乗合バスの発車を待つて
いる間に乗り組んだ商人が運転手を相手に先刻トラックで老婆が
ひかれたのを目撃したと言つて足の肉と骨とがきれいに離れてい
たといったようなことをおもしろそうに話していた。バスが発車
してまもなく横合いからはげしく何物かが衝突したと思うと同時
に車体が傾いて危うく倒れそうになつて止まつた。西洋人のおお
ぜい乗つた自用車らしいのが十字路を横から飛び出してわれわれ
のバスの後部にぶつかつたのであつた。この西洋人の車は一方の
泥どろよけがつぶれただけですみ、われわれのバスは横腹が少しへこ
んでペイントがはがれただけで助かつた。肥ふとつた赤ら顔の快活そ

うな老西洋人が一人おり立って、曲がった泥よけをどうにか引き曲げて直した後に、片手を高くさしあげてわれわれをさしまねきながら大声で「ドモスミマシエン」と言つて嬌えんぜん然一笑した。そうして再びエンジンの爆音を立てて威勢よく軽井沢かるいざわのほうへ走り去つたのであつた。

九月初旬三度目に行つたときには宿の池にやつと二三羽の鶺鴒せきれが見られた。去年のような大群はもう来ないらしい。ことしはあひるのコロニーが優勢になつて鶺鴒テリトリの領域を侵略してしまつたのではないかと思われる。同じような現象がたとえば軽井沢のような土地に週期的にやって来る渡り鳥のような避暑客の人

間の種類についても見られるかどうか。材料が手に入るなら調べてみたいものである。

(昭和九年十二月、文学)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第五卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年11月20日第1刷発行

1963（昭和38）年6月16日第20刷改版発行

1993（平成5）年10月15日第61刷発行

入力：田辺浩昭

校正：かとうかおり

1999年11月17日公開

2003年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あひると猿

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>